

全国学力・学習状況調査 嘉穂小学校

1 調査目的等

・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
 ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
 ・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

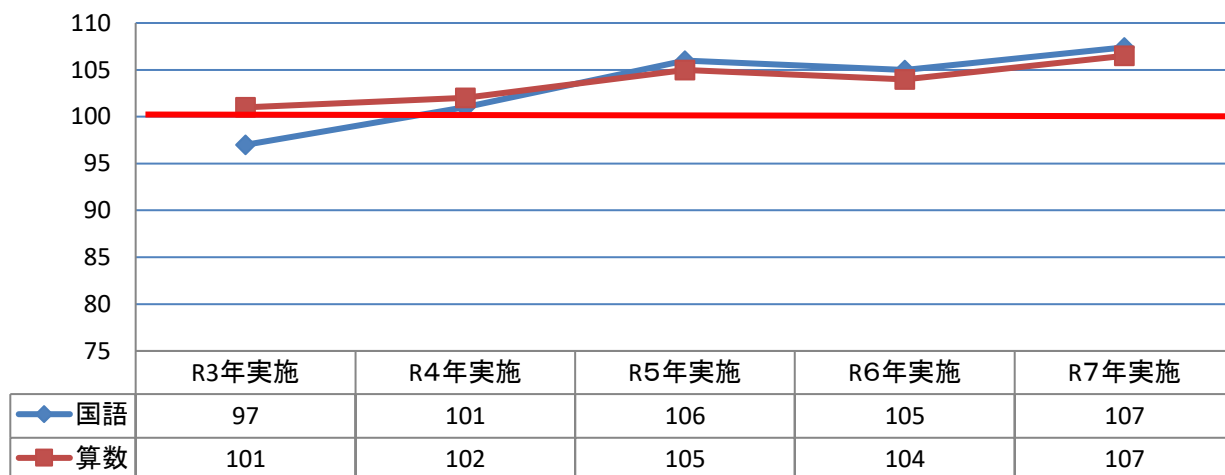
2 学校における学力向上に向けての取組

・ねらいを明確にした授業づくりの実施(指導→評価→次の指導)
 ・算数科における重点単元の設定および、複数体制による習熟・補充学習の実施
 ・朝の活動における、複数体制による取組(未来への一歩、MIM、読解問題)
 ・家庭との連携による学年・個に応じた家庭学習の習慣化

3 調査結果(全国の平均正答数を100としたときの標準化得点)

	国 語	算 数
本校	107.4	106.5
嘉麻市	91.5	83.9
全国	100	100

推移



4 各学校における分析

- ・国語科・算数科共に、全国平均を約7P上回った。
- ・国語科においては、読解タイムの設定や「書く活動」を取り入れた授業改善の成果が表れていると考える。また、算数科においては、重点単元での習熟度別学習や補充学習(朝の算数タイム、昼チャレ)に担任外教員も活用し、複数体制での組織的な指導の成果が表れてきたと考える。
- ・学力四分位層では、国語科(A層:-2.4、B層:-7.6、C層:3.5、D層:-8.6)は、A層の割合が低く、算数科(A層:12.3、B層:-6.9、C層:2.4、D層:-8.0)は、令和6年度よりD層の割合が減少したものの、2極化の傾向が見られた。
- ・領域においては、国語科は「情報の取扱に関する事項」、算数科は「データの活用」の正答率が低い傾向にあり、語句の関係性を考えたり、条件に合った資料を選択して説明したりすること等、思考や記述をする授業場面の設定が不十分であったことが考えられる。
- ・家庭学習の習慣は身につくつつあるが、質問用紙では「ICTの活用」や「主体的に課題に取り組む姿勢」のポイントが低く、主体的に課題に取り組む姿勢の育成が必要だと考えられる。

5 各学校における今後の取組

- ・算数科における各四分位層の児童の理解を深めるため、習熟度別や複数体制での指導を行い、実態に応じた学習展開を工夫する。
- ・CD層の基礎・基本の力の定着のため、担当教員が個の課題に応じた教材を準備し、補充学習(朝の算数タイム、昼チャレ等)を組織的・継続的に実施する。
- ・テンミニαやタブドリを活用した家庭学習を行い、スモールステップでの課題克服を行うようにする。特に以下の2点について、徹底して行うようにする。
- ・記述する力の定着のため、国語科・算数科の学習を中心に、低学年から自分の考えを論理的に書く活動を位置付けた学習活動を日常化する。
- ・語句の関係性を考えたり、条件に合った資料を選択して説明したりする力の向上を図るため、強化月間を設定し、全職員で指導にあたる。

6 嘉麻市教育委員会としての今後の取組

- 子どもが進んで問題解決を図る授業づくりを推進することで、主体的に取り組む態度とともに、思考力・判断力・表現力の育成を図る。
- 小・中・義務教育学校とも、単元テストをもとに短いスパンで評価することを通して、一人一人の学習の定着状況を見とるとともに、個に応じた授業づくりを推進し、C・D層の子どもの学力向上を図る。
- 家庭学習の充実や帯学習の取組など、組織的な学力向上の取組を構築することを通して、基礎基本の定着を図る。